

# 円形野外講堂

久留米市文化財調査報告書 第202集

2004.3

久留米市教育委員会

## はじめに

久留米市は長い歴史を持つ都市です。歴史の蓄積が様々な形で残されてきています。縄文・弥生という古い歴史もわかりませんが、意外と新しい歴史もわからなくなっています。この報告書は現在から60数年前に建設された陸軍墓地内の円形野外講堂の調査報告です。

この講堂はアーチを基本とした優れた設計に基づいて建設されていますが、市民の方でその所在を知つておられる方は少ないと思います。戦争が激化し、物資不足の中で建設されたものです。長い年月を経て、痛みもありますが、戦争の時代の遺跡として記録を残すものです。

最後になりましたが、本書が近代の建造物への理解、戦争の時代の理解への一助となり、さらに学校教育・学術研究の資料として活用していただくことをお願いして、ご挨拶といたします。

平成16年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 石川 集充

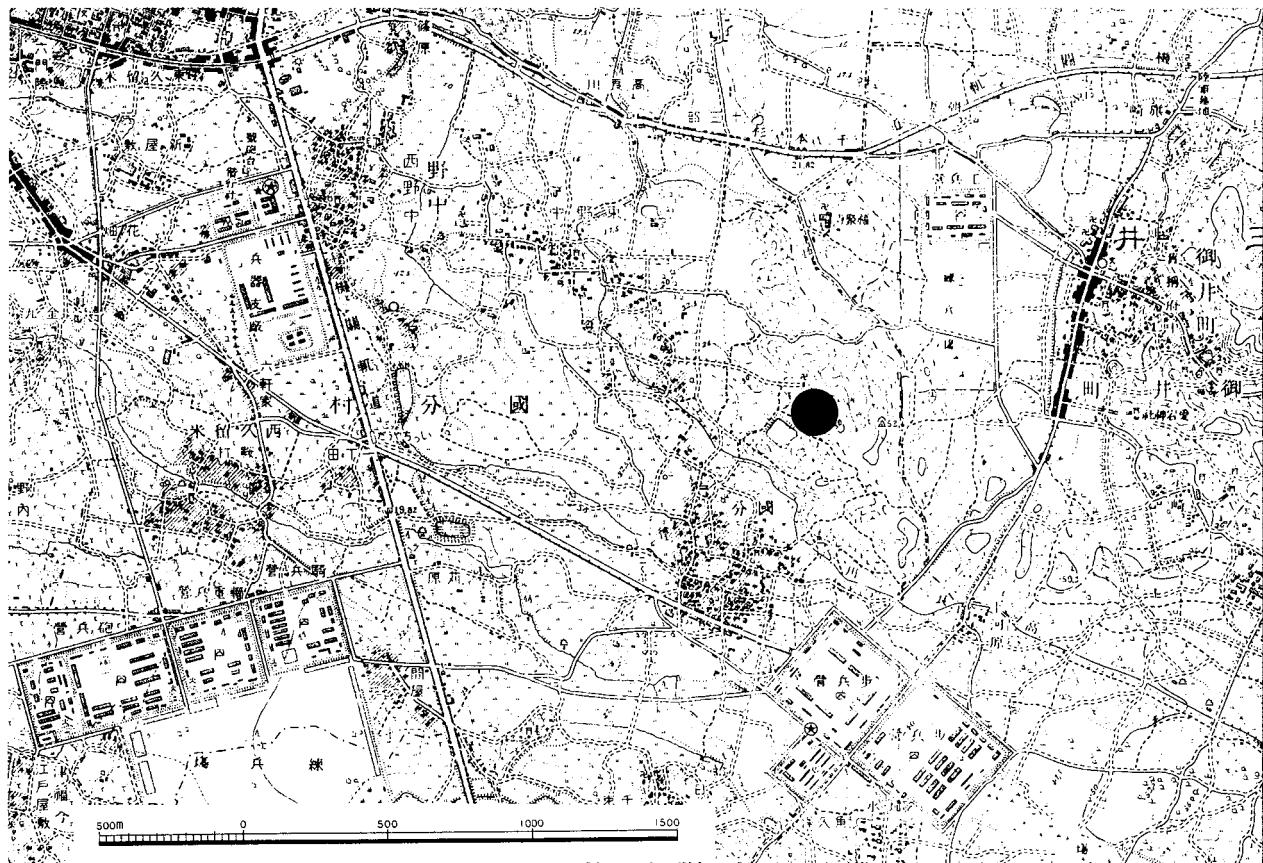
## 例　　言

1. 本書は久留米市野中町にある円形野外講堂の建造物調査記録である。
2. 調査は久留米市文化財専門委員会委員宮本達夫氏（長崎活水女子短期大学教授）に依頼し、一部の調査は教育文化部文化財保護課の近澤康治、古賀正美が担当した。
3. 本書に掲載した遺構図はトータルステーションとカタシスシステムを用いて図化した。
4. 図面の浄書は近澤康治の指導のもと丸山裕見子が担当した。
5. 空中写真を除く遺構写真は各担当者が行った。
6. 本書の執筆は第4章を宮本達夫、第1、2、3章、付論を古賀正美が行ない、編集は古賀が担当した。

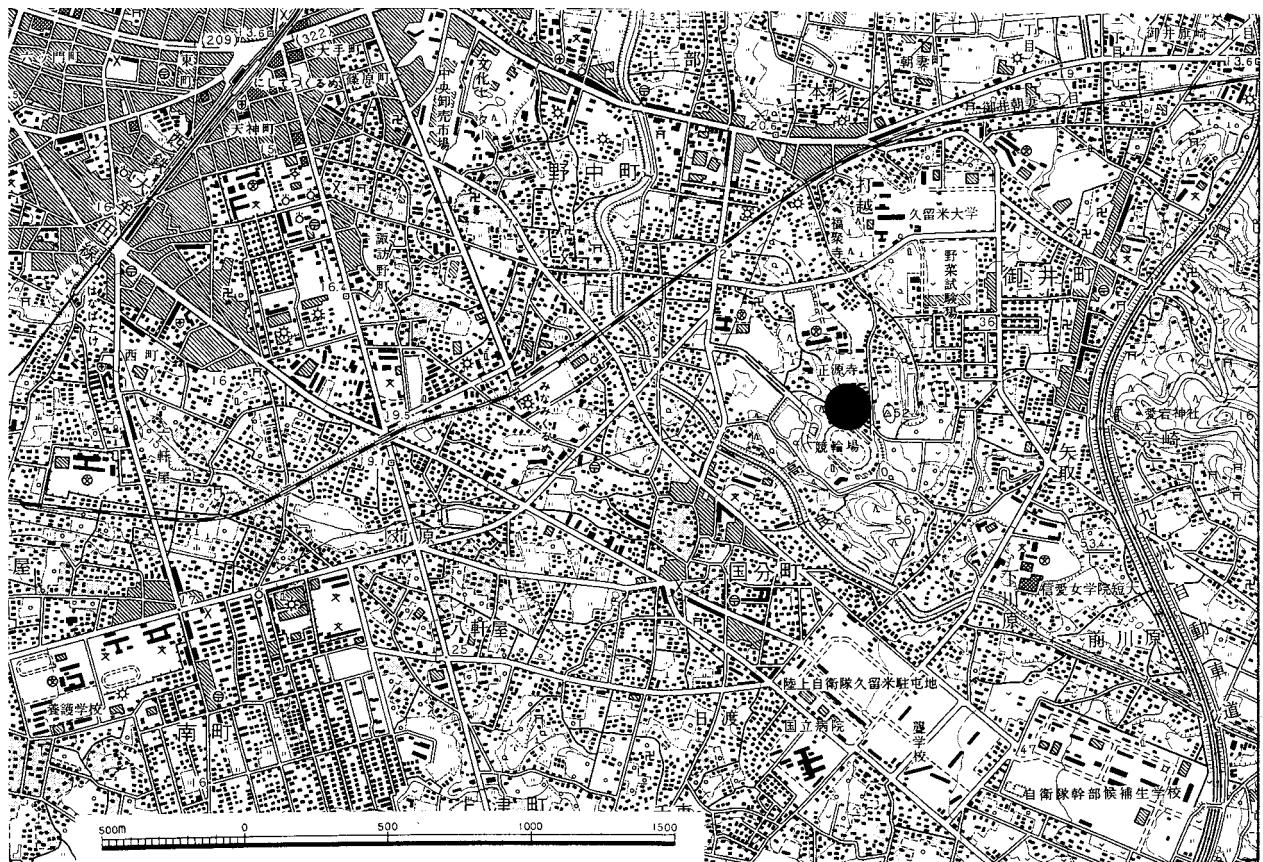
## 本文目次

はじめに	3
第1章 調査の経緯と記録	3
第2章 位置と環境	3
第3章 遺構の状況	3
第4章 建築学的考察	8
第1節 はじめに	
第2節 配置構成	9
第3節 ステージの平面構成	12
第4節 ステージの立面構成	12
第5節 座席の詳細	13
第6節 考察	18
第7節 まとめ	18
付論 久留米陸軍墓地について	21

※野外講堂の調査にあたって、久留米市商工部競輪事業課に協力を得た。謝して記したい。



第1図 陸軍墓地位置図(日) (大正6年大日本帝国陸地測量部)



第2図 陸軍墓地位置図(月) (平成3年国土地理院)

## はじめに

### 第1章 調査の経緯と記録

今回の調査は野中町字池谷23-3所在の円形野外講堂周辺に久留米競輪場の駐車場用地が計画されたため、事前にこの建造物の建築学的な調査を行ったものである。

調査は8月19日に開始した。ステージ前面広場が埋没していたために、重機を使用して旧地面までほりさげた。また、ベンチ部分の清掃をかねて、ベンチ周辺の流入した土砂を人力で排除し、旧状の把握につとめた。ステージの両袖に階段4段を検出している。

南側座席部分には柿の木及び棕櫚の木が生えており、根の除去及び土砂の排出に時間を要した。地元の方から円形講堂に入口にあたる階段の存在を教えていただき、南側土壘での階段の確認調査をおこない、1か所の階段を確認した。

ステージ背後にもレンガの基礎が露出しており、その床及び基礎を確認した。楽屋とよばれる付属施設の遺構と推測される。昭和20年8月の敗戦後、この施設に居住された方があり、それに伴う便所・手洗い場など施設基礎も確認されている。

遺構の確認とともに遺構の測量をおこなった。8月20日、21日に建築学的な実測調査をおこない、遺構の掘り下げの進展に伴い遺構配置図等の作成をおこなった。全体遺構の気球による撮影は9月2日におこなった。3日には個別の遺構の写真撮影をおこない、継続して遺構の実測を継続しておこない、調査は9月6日に終了した。

今回、遺構の測量にはカタダシステムを用い、遺構の平面図作成に限らず立体図の作成もおこなった。

### 第2章 位置と環境

耳納山地の西端にある高良山の麓は緩やかな台地をなすが、そのひとつに正源寺山とよばれる丘陵地がある。この丘陵の一角に陸軍墓地が作られている。円形野外講堂はその墓地の一施設である。この周辺は黄檗宗正源寺にちなみ正源寺山と呼ばれるが、この陸軍墓地は昭和14年7月着工、17年4月完成したものである。陸軍墓地はこの地に移転するまでは北東1.6kmにある旗崎招魂社の北側に設置されていた。

墓地の東に隣接して工兵隊作業場と西部第52部隊が、南方0.7kmは国分地区で現在も自衛隊駐屯地として使用されているが、旧西部第48・49部隊、陸軍病院、第一陸軍予備士官学校が設置されていた。

西方1.9kmの現諫訪野町には兵器廠、師団本部、南西1.9kmの現南町には騎兵、輜重兵、砲兵隊営所及び牟田山練兵場が設置されている。このようにこの陸軍墓地は旧陸軍関係施設に囲まれ、軍都久留米を象徴する施設が集中する地域の中に存在する(第1図)。

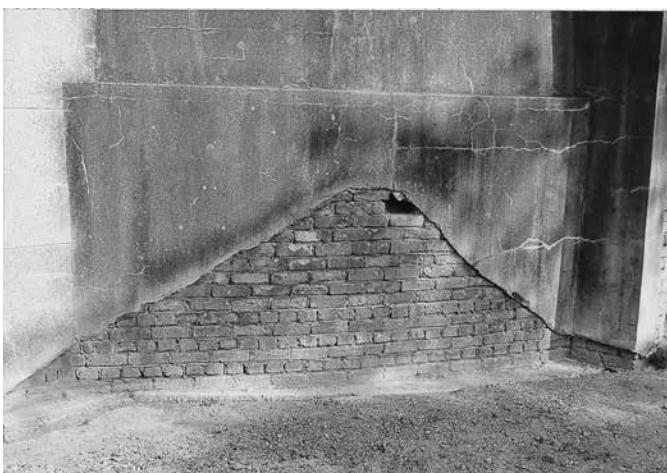
陸軍墓地は広さ3万坪あり、奥まった地に忠靈塔が設置され、それにつながる参道が設置され、アーチ橋である陸軍橋、遥拝塔、臨川亭が設けられている。なお、山川陸軍墓地からの移転であるため、第一次世界大戦の日独戦争でのドイツ兵俘虜の墓も移転している。

### 第3章 遺構の状況

今回の調査で円形講堂は谷奥部の地形を整形して建設されている。全体は円を基本にして建設されていくことが実測図であきらかであるが、ステージに向かって右側は地山を大きく円形に削り出し、左側は前者に対しては整形を加えた程度の削り出しで円形をつくりだしていることが現地観察であきらかである。



第3図 円形野外講堂全景、競輪場を望む（気球写真）



第4図 ステージ背後（西から）



第5図 検出した南側の階段

左側半分に土壌が現状で確認できるが、右側半分には土壌状の高まりがなく、開放的なスペースとなっている。南側に廻る土壌のレベルと北側の土壌がない部分のレベルがほぼ一致することから、北側には当初から土壌はなかったと推測される。しかし、ステージの両側は土壌が廻らず、円形の設計思想にそぐわない部分がみえるが、次の点からステージ背後に土壌が貼り付いていたと考えられる。

ステージ背後は全体にモルタルを塗るが、楽屋内部の壁など外部から人の目に触れないところはモルタルを塗っていない。楽屋部以外にもステージ背後の両側には下底幅3.5m、上幅0.4m、高さ1.15mの台形状にモルタルがない部分がある（第4図）。同様な形態をとることから両側に同じ施設があったことを示すものである。この痕跡は断面が台形の土壌がこの部分に貼り付いていたことを示すものであろう。これにより円を基本とする設計思想が完結することもその理由である。

背後の楽屋屋根はステージ背後に取り付いていたことが、擁壁上部に屋根形にセメントの貼り付け痕跡が見られることから推測されるが、現状は煉瓦の基礎を残すのみなので建物内部の構造は不明である。

ベンチは旧状をよく残しているが、向かって左側ベンチのステージよりの部分は土砂で埋まった部分が多く、柿の木、棕櫚の木の成長により基礎が緩みズレている部分がある。また、この付近はベンチ表面のモルタルが剥落し基礎の煉瓦も痛んだものが多い。

ステージとベンチの間は南側ではステージの高さまで埋没していた。この部分はベンチ部分が傾斜地に建設されていることから土砂の流れ込みもあるが、土量が多さからステージ周辺の土壌の土などで人為的に埋められたのではないかと推測された。この土を取り除くとステージ

両端に階段を検出した。

講堂への入り口は楽屋部分からと客席の中央部の水平通路につながる部分にあったと推測されたが、南側では土壘を断ち切る形で階段部分を検出したが、北側部分では階段遺構を検出することができなかつた。

南側では階段三段を検出したが、この階段はステージ両端のような階段ではなく、地山を整形して階段を作り、踏み込みだけにモルタルをかぶせた簡易のものであった。北側の階段は検出していないが、壊されてしまった可能性が大きい（第5図）。

ベンチとベンチの間、水平通路、斜行通路などをも清掃及び土砂の排出などを行ったが、この部分に玉石利などを敷設したなどの明瞭な痕跡は確認できなかつた。当初から、赤土が露出したままであつた可能性が大きい。また、排水施設なども確認していない。

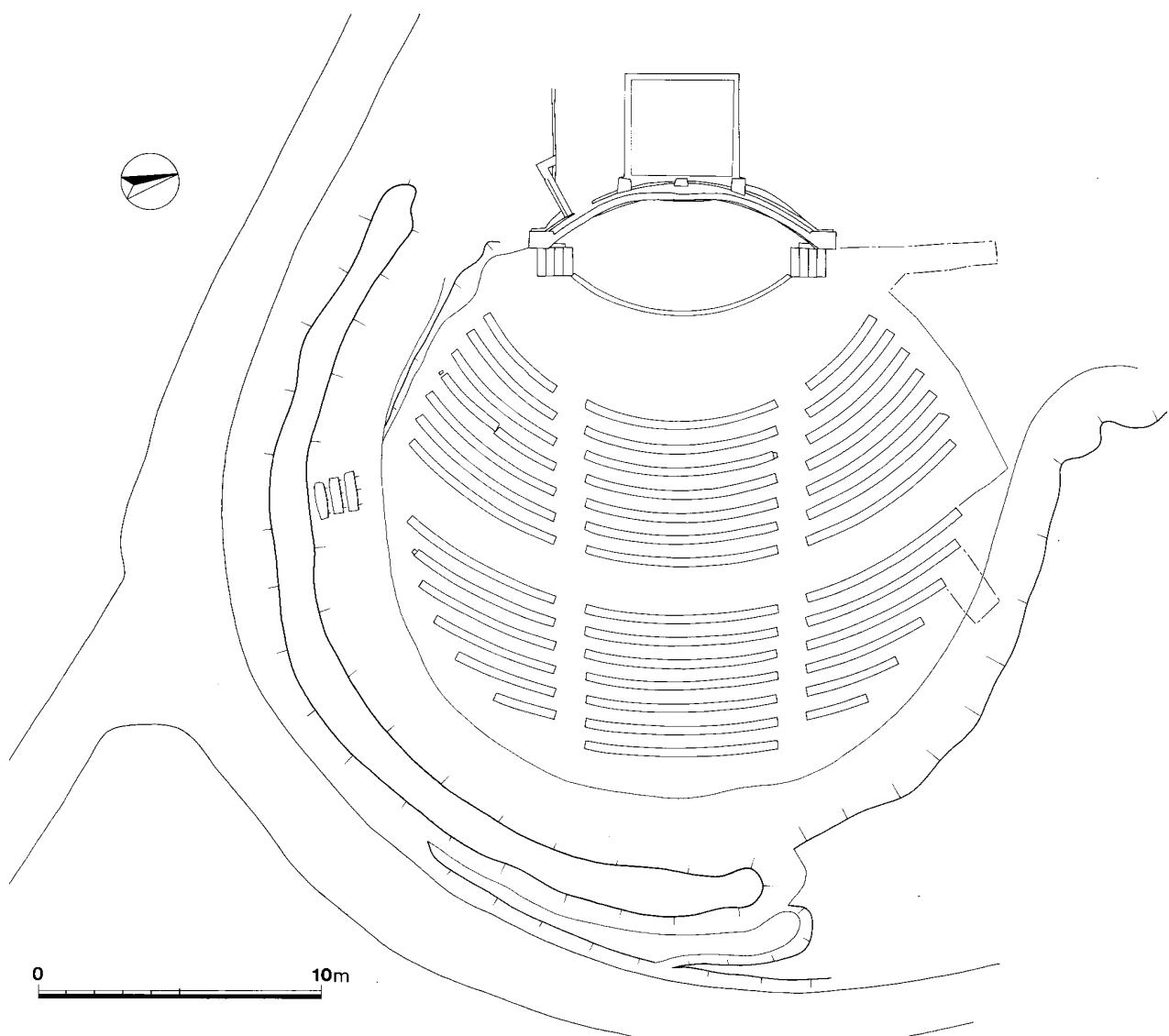
ステージの背後の壁には黒板2枚、及び扁額があるが、それ以外に上部に幕などを架けるための物と思われる鉄製鉤型が5本一組で、2か所設置されている。また、現状ではステージ平面には構造物がないが、中央部には演台が設置された痕跡が確認されている。

野外講堂は全体的に煉瓦及びモルタルで構築されているが、これだけの構造物でありながらステージの扁額を支えるための鉄筋と幕をつるための鉄鉤型のみであり、鉄製品がほとんど使われていない。構造上鉄筋などを使用せず出来る建造物かもしれないが、第2次大戦中の物資不足を具体的に体现する建造物といえるのではなかろうか。

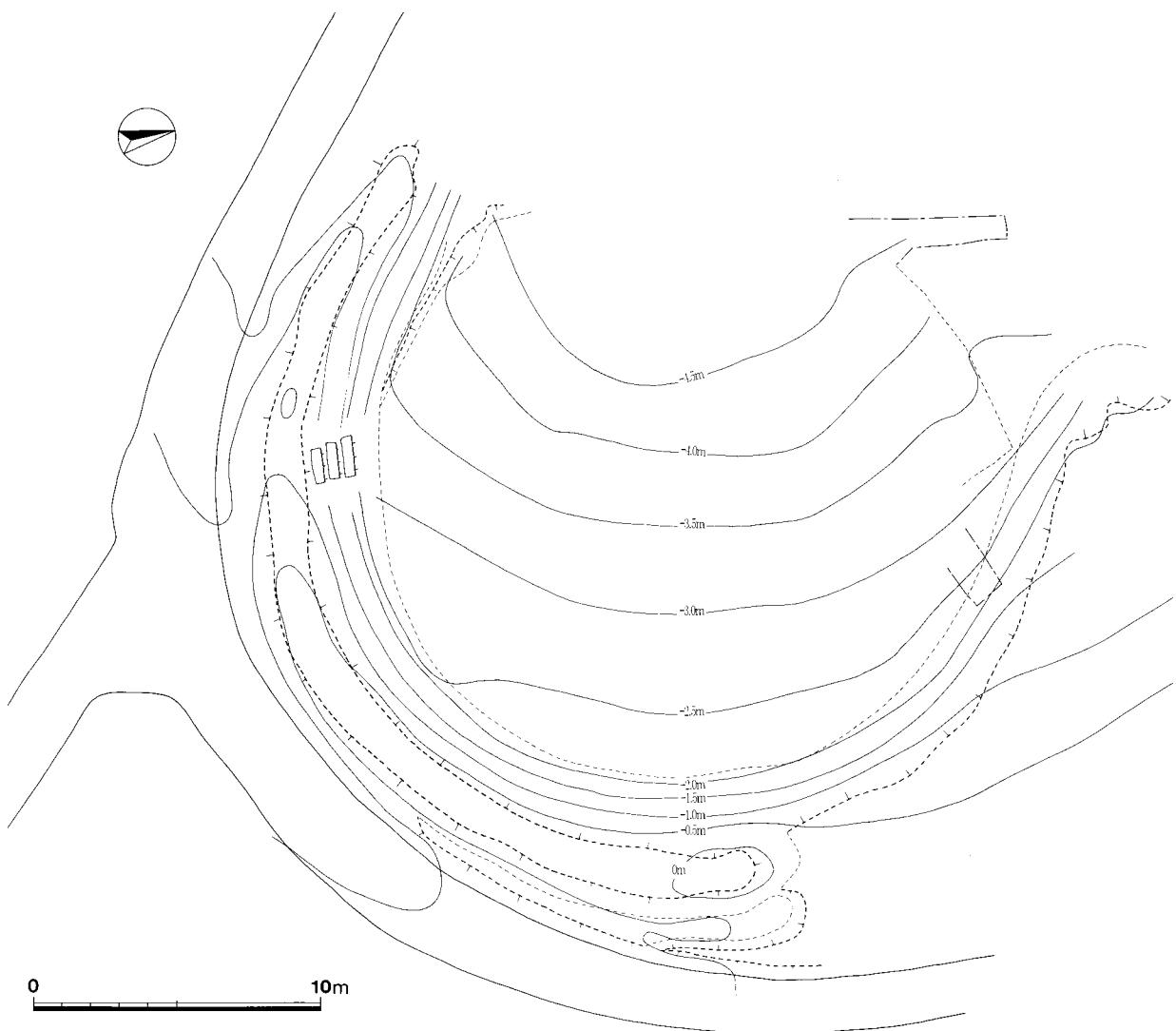
(注) 本書では、この遺構を「円形野外講堂」としたが、文献等では「野外講堂」で現れる。呼称に「円形」を付加したのは、この建造物の特徴を端的に表現できると考えたからである。



第6図 調査前の円形野外講堂（北東から）



第7図 円形野外講堂実測図 (S=1/250)



第8図 円形野外講堂地形図 (S=1/250)

## 第4章 建築学的考察

本章では歴史的に同種の施設である古代ギリシャ・ローマの劇場について代表的な例を参考にしてその概要をまとめ、次にそれらと比較しながらこの円形野外講堂を建築学的侧面における詳細な説明を行い、その内容を把握した上で考察を行うことを目的とする。その際、実測調査により得た野帳をもとに作成した6面の図面を参考にしつつ節を進める。

### 第1節 はじめに

#### (1) 概要

この円形野外講堂は昭和14年7月から同17年4月にかけて造営された陸軍墓地における構築物群の一つである。陸軍墓地の敷地内にはこの講堂の他に忠靈塔、遥拝台および久留米市では珍しいアーチ橋である陸軍橋などの構造物が点在している。建設年代については上記陸軍墓地の造営の期間内に建設されたということ以上の詳細は不明である。

具体的な利用方法についても不明であるが陸軍墓地付属の施設であることからそれと関連する行事や記念日などに多くの人々によって集会が行われたと想像される。その際使われたと思われる大小の石製黒板二面がステージの壁に嵌め込まれており講演会なども催されたと想像される。

#### (2) 古代ギリシャ・ローマの劇場建築

古代ギリシャの劇場は屋外に造られた。その理由はギリシャにおいては雨が少ない温暖な地中海性気候であるために支障が無かったからである。また劇場は当初、構造的な技術が無かつたため舞台だけが構造物として造られ、客席は自然の斜面を利用した簡素な造りであった。当初は座席すら無く観客は直接斜面に座ったといわれている。後に紀元前4世紀頃から石造の客席(カウエア)が造られるようになった。紀元前4世紀後半に建設され、現在最も保存状態が良いといわれるエピダウロスの劇場を例にしてその構成を見てみる(第9、10図参照)。中心部分はオルケストラと呼ばれる直径約20メートルの舞台である。この上で俳優たちや合唱隊がギリシャの悲劇や喜劇を演じた。その後方に楽屋兼舞台の背景となるスケーネがある。その前面の一階部分はプロスケニオンと呼ばれ列柱廊を有している。ここも舞台背景となったがその屋上部分はロゲイオンと呼ばれる現代の劇場と同じ機能を有する舞台であった。しかし主として舞台として使われるのはオルケストラであり現代の劇場の構成と幾分異なる。俳優たちや合唱隊はプロスケニオンの上手と下手にあるパラドスという通路から入退場した。

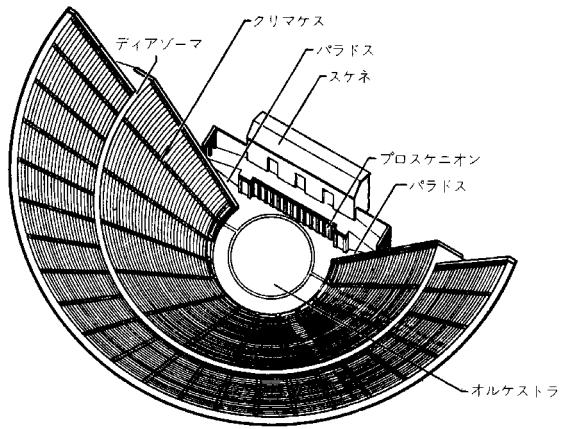
客席はディアゾーマという水平通路によって上下二段に分かれ、さらにクリマケスと呼ばれる斜行通路で区画分けされている。客席の面積は5,870m<sup>2</sup>で13,000~14,000人の観客を収容したと考えられている。尚、客席の傾斜角度は26度~26.7度であり、最後列の客席からプロスケニオン全面までは70メートル以上の長さがある。

ローマ時代に入るとその形式が若干変化した。紀元前1世紀末から紀元2世紀にかけて建設されたオステイアの劇場を例にして比較してみる。変化の一つはオルケストラが円形から半円形に変化したことである。またギリシャではここが主な演じる場所であったがローマ時代ではここが上流階級の人々の客席へと変化した。また古代ローマはアーチを主とする構造技術(アーチシステム)が進歩した結果、客席を作るのにあたり自然の傾斜を利用して最上部の客席はボルト構造を用いるなど大規模な構造体となった。その結果、劇場全体が周囲の壁や高くなったスケーネなどによって囲われた形態となりギリシャの劇場に較べて閉鎖的な空間構成へ変化した。



第9図 エピダウロスの劇場

(建築学会編「西洋建築史図集」第三訂版1981より引用)



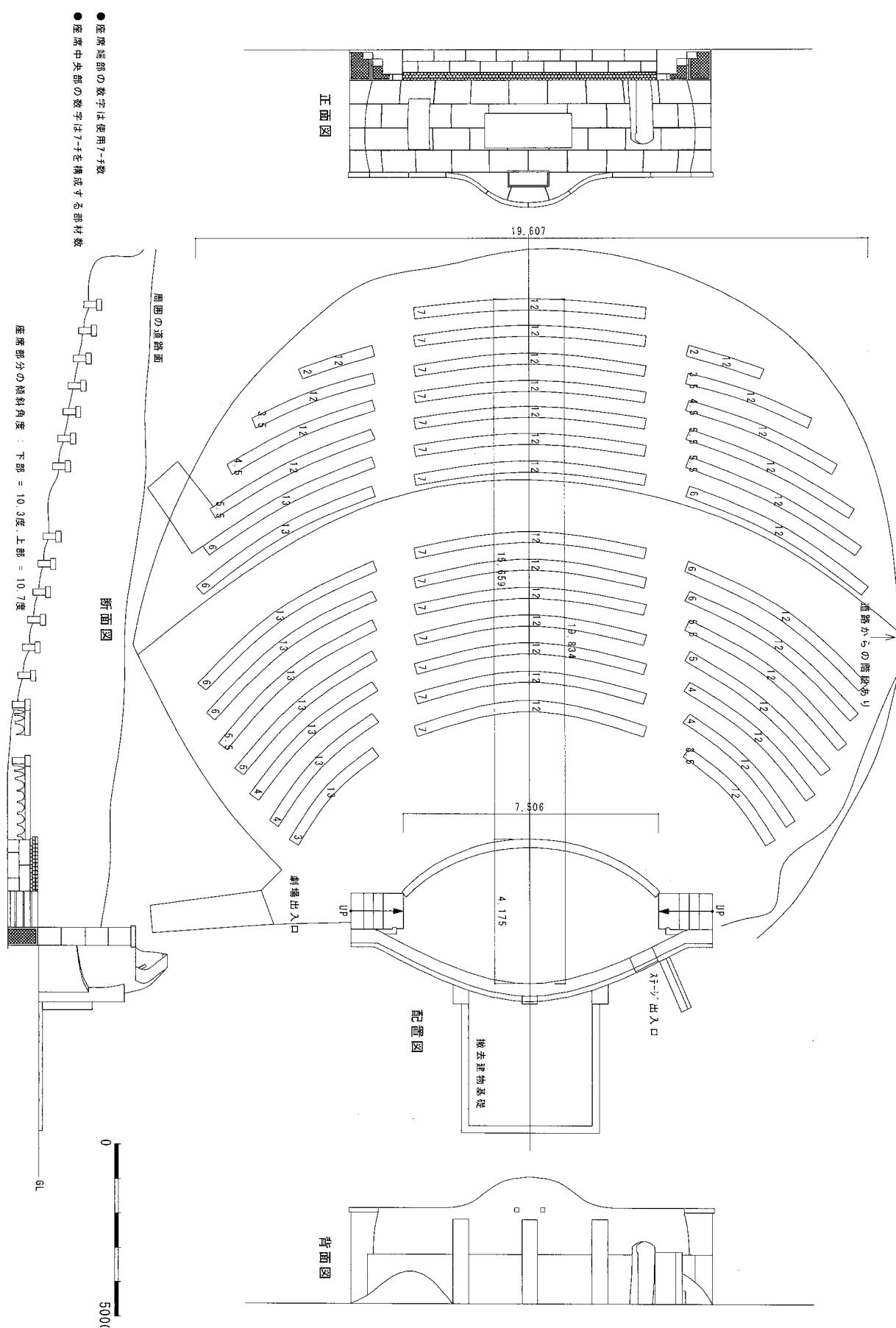
第10図 エピダウロスの劇場平面図

## 第2節 配置構成

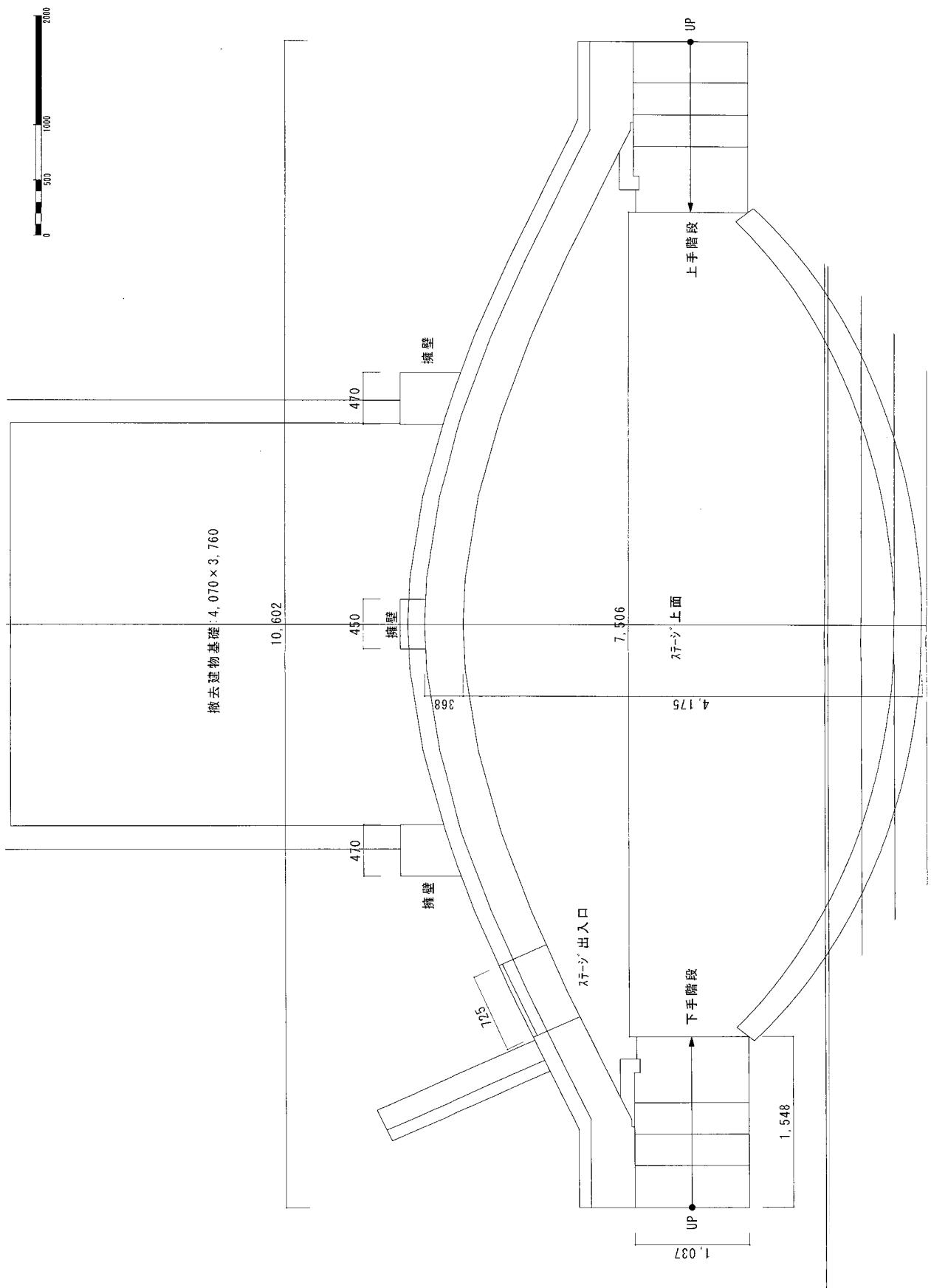
この円形講堂はなだらかな斜面を利用した配置構成を取っている(第11図全体図参照)。規模は直径約20メートルの円形の敷地にステージ、客席および通路が配置されている。よってその全体の面積は約314m<sup>2</sup>となる。昭和23年に久留米陸軍墓地奉賛会から久留米市に寄付された時の記録によればその面積は「拾六坪」となっている。これを換算すると52.8m<sup>2</sup>でこの数値はステージおよびその背後の建物の面積であり客席の面積は算入されていない。プロスケニオンに相当するステージ背面から客席最後部までは19.8メートルでエピダウロスの劇場のそれが70メートルであるから1/3以下の規模であるということになる。客席全体の幅は約19.6メートルである。

ステージ前面には客席との間に平場(幅約3.7メートル)があり、その後端から客席が配置されている。客席は第5節で述べるようにセメント煉瓦で造ったアーチを連ねて脚部とし、その上に同じ煉瓦で座面が作られている。客席は幅約1.5メートルの水平通路(ディアゾーマ)と幅約1.3メートルの斜行通路(クリマケス)によって6つの部分に分割されている。中央部の座席は最も大きく幅約7メートルで上段と下段にそれぞれ7列配置されている。座席群はステージを中心とする同心円状に配置されているため上段に行くに従って座席の曲率が大きくなっている。両側の座席群の長さは最小約2.3メートルから最大6.2メートルである。下段に7列、上段に6列並び、敷地の形状に合わせた配置になっている。外部から客席への入場は発掘調査によるとステージに向かって左側の道路から階段で降りる個所とその反対側のステージ脇および上部客席脇にあったようである。全体の配置は上述したように直径約20メートルの敷地を持ち、ステージの中央部を中心点とする同心円状に座席が配置され大変整った構成を見せている。

一つ疑問に残ることは雨水の処理方法である。客席からステージに向かって下り斜面になっており、雨水は当然ステージ方向へと流れる。上下の客席を分ける水平通路にもステージ前面および側面にも排水溝が発見されなかった。そのため雨天時にはステージ前の平場に雨水が溜まったと思われる。通路やステージ前の平場は舗装の痕跡も無いことから雨天時は相當にぬかるんでいたと思われる。古代ギリシャやローマの劇場



第11図 円形野外講堂全体図



第12図 円形野外講堂平面図



第13図 円形講堂全景（北から 気球写真）



第14図 円形講堂全景（北西から 気球写真）

の場合は排水設備に関する事柄は不明であるが、少なくとも石造の舗装がなされており、雨水でぬかるむことは無かった。

### 第3節 ステージの平面構成

上手および下手の階段を含めた幅は約10.6メートル、ステージ前端からプロスケニオン前面までは約4.2メートルの大きさで楕円形をなしている（第12図参照）。上手および下手階段は出演者が入退場する古代の劇場におけるパラドスに相当するであろう。階段幅は約1メートルで4段目がステージ上面になる。下手の隅に幅約70センチのステージへの出入口がある。プロスケニオン背後にそれに接続した4,070×3,760ミリの基礎が残存しており楽屋または控え室が建っていたと思われ、ステージへの出入口はそこから接続している。

この円形講堂には古代のオルケストラに相当する部分はない。ステージの形状に限っていとギリシャのそれが円形であるのに反してオスティアやアスペンドスの劇場に代表されるローマの劇場のオルケストラは半円状になるが、この野外劇場のステージも半円状であり古代ローマのものに類似している。

最も特徴的なことはプロスケニオンが平面的および断面的に曲面をなしていることである。つまりレンズ状になっている。この球面は音響効果を期待したらしいがその効果は今後の利用機会で判明するであろう。古代ギリシャや古代ローマの劇場のプロスケニオンはステージ面から垂直に立ち上がっており、当野外講堂のような曲面は使われていない。しかし、古代の劇場ではその音響効果は抜群であり、現代でも毎年夏の時期に演劇などが上演されていることからこの円形講堂も相当の音響効果が期待出来る。

### 第4節 ステージの立面構成

プロスケニオンの立面は前節で述べたように曲面状でかつ端部から中央部にかけては反曲点を介して中央部が盛り上がった特異な形態をしている（第15図参照）。全体幅は約10.6メートル、高さはステージ面から中央部の盛り上がり部分までが3,691ミリ、その両側の肩部までが2,804ミリの規模である。またステージの高さはGL面から

870ミリである。中央部と上手側に石製黒板が二面ある。それぞれ幅2,550×高さ1,010ミリ、約幅640×高さ1,460ミリである。表面に黒色塗料を塗った痕跡があり講演者が使用したと思われる。また中央の上部には御影石製の扁額が掲げられており(幅1,214×高さ480×厚さ75ミリ)、志岐豊墓地建設奉賛会長の書「養其神(その神を養う)」と彫られている。下手側に裏からステージへの入口があり上部はアーチ状になっている。

プロスケニオン本体は客席と同じセメント煉瓦で作られその表面はモルタル仕上げがなされている。ただしステージ側は装飾的に5段の目地が切られている。ステージも同じくセメント煉瓦で作られ上部の3段は客席側に迫り出している。同じくモルタルで上塗りが施されている。

背面にはプロスケニオンを支えるための擁壁が三本建つ(第16図参照)。中央部は幅450ミリ、両側は幅470ミリで高さはそれぞれ2,460ミリである。全体はGLから約1,500ミリの部分までが厚く、その部分から曲面を形成するステージ側への前傾部分がはじまっている。下部壁が20段、その上部が16段の小口積みの煉瓦で造られていることが分かる。この部分は現在ではモルタルが剥離しているが全体を覆っていたようである。また両側には何かの構造物が張り付いていたと思われる山形の痕跡があるがその詳細は不明である。

側面から見るとステージ部分とプロスケニオン部分とで構成される側面は曲面がもたらす効果により非常に立体的であり迫力がある(第17図参照)。プロスケニオンを境にステージ側と背部でGLからの高さが異なることも立体的な効果に寄与している。

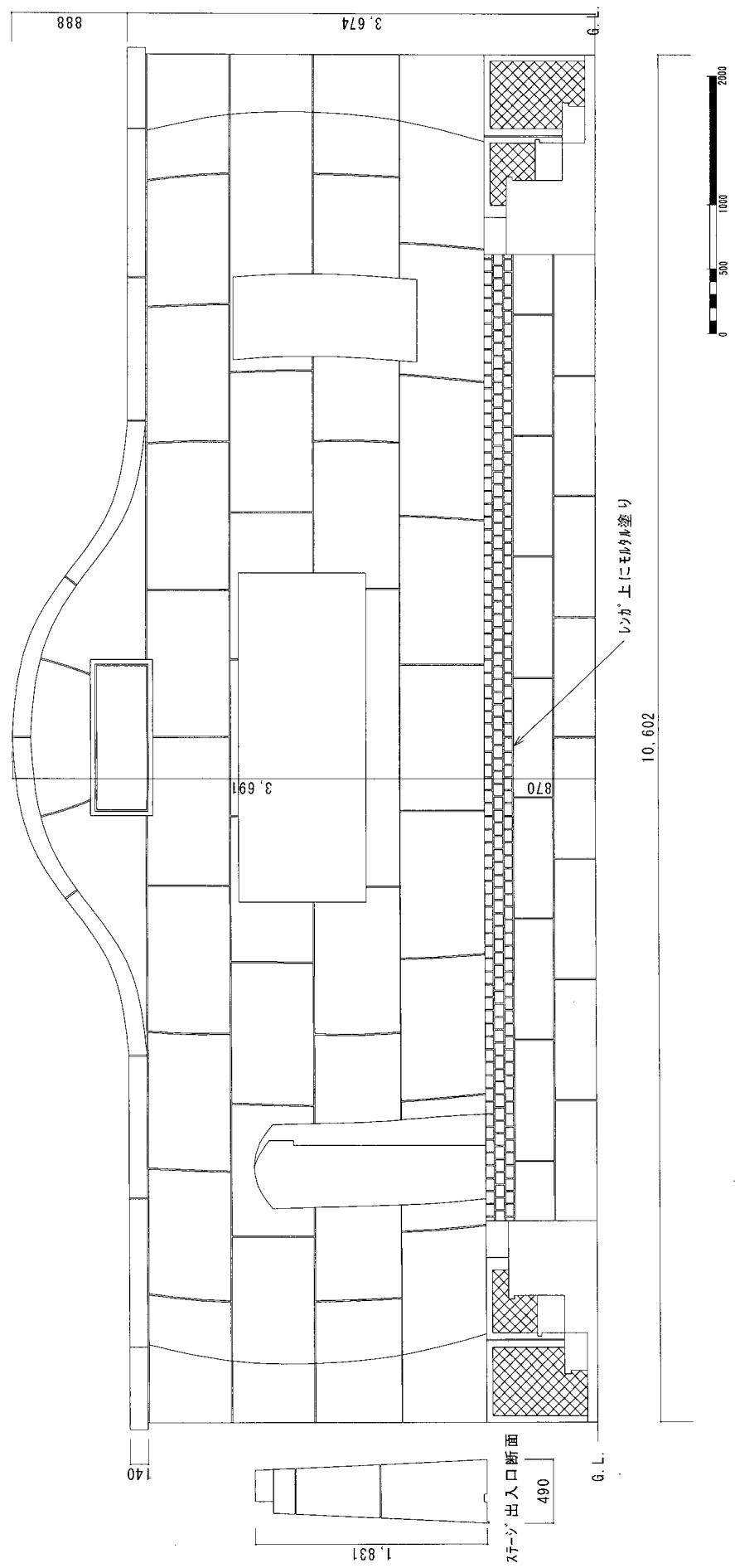
次に断面的に見ると上段と下段を分ける水平通路を境にして座席傾斜角度は下部座席群が10.3度、上部座席群は10.7度で若干異なる(第11図参照)。上述したように古代におけるエピダウロスの劇場では客席の傾斜角度は26度～26.7度であるからこの野外講堂はそれと比較すると相当に緩やかな角度で拡がりを感じ、古代ローマ劇場のような閉鎖的な空間ではなく周囲に開けた空間となっている。座面の高低差は中央部下段の7列が75センチ、上段の7列が90センチで、全体では207センチである。次に前後における座席の座面の高低差は座席の厚さとほぼ同じとなっている(14～15センチ)。よってステージ上のある高さから客席を見るとほぼ座席側面が水平に揃って見えることになる。統計によると日本人の頭長の平均値は男性が23.9センチ、女性が23.1センチである。座面の前後の高低差と頭長が一致すれば人間工学的な設計がなされたと言えるのだが戦中の設計であるからか、その点までは考慮されなかったようである。

## 第5節 座席の詳細

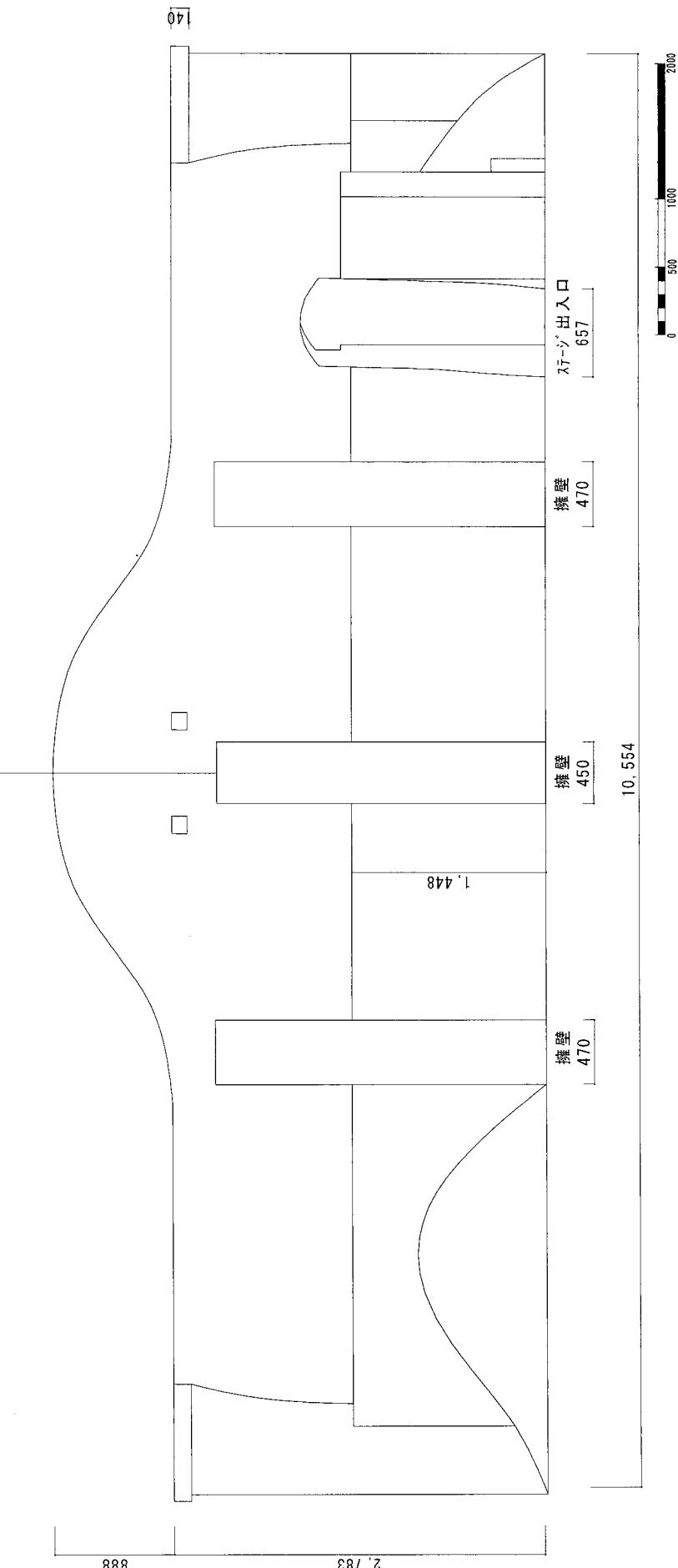
座席脚部を構成するアーチには二種類あり、一つは12個の煉瓦で造られ、もう一つは13個の煉瓦で造られている(第18図参照)。本来アーチは両側から順次部材を立ち上げ最上部中央のキーストーンで全体を締めるという構造であるためキーストーンの存在が最も重要であり、それが存在しなければアーチは崩壊してしまう。よってアーチを構成する部材数は奇数となるべきである。12個の煉瓦で構成されるアーチが存在することはデザイン面を考慮してこのアーチ式を採用したと考えられる。13個の煉瓦で造られた座席の方が少なく、ステージに向かって右側の最前列から9列でそれ以外の座席は全て12個の煉瓦で造られている。図面番号1/6の全体図において座席中央部に表示した数字は12個と13個で造られた座席を示している。また座席端部に表示した数字はその座席を構成するアーチの数を示している(3.5や5.5で表示した部分はアーチが半分という意味ではなく本来アーチとなるべき幅が不足するため壁のままの状態を示している)。

使用煉瓦の寸法は12個のアーチ煉瓦 = 100×215×65ミリ、13個のアーチ煉瓦 = 105×225×60ミリで若干異なる。煉瓦はいずれもセメント煉瓦で12個のアーチは13個のアーチより品質が若干落ちる。このことは座席の

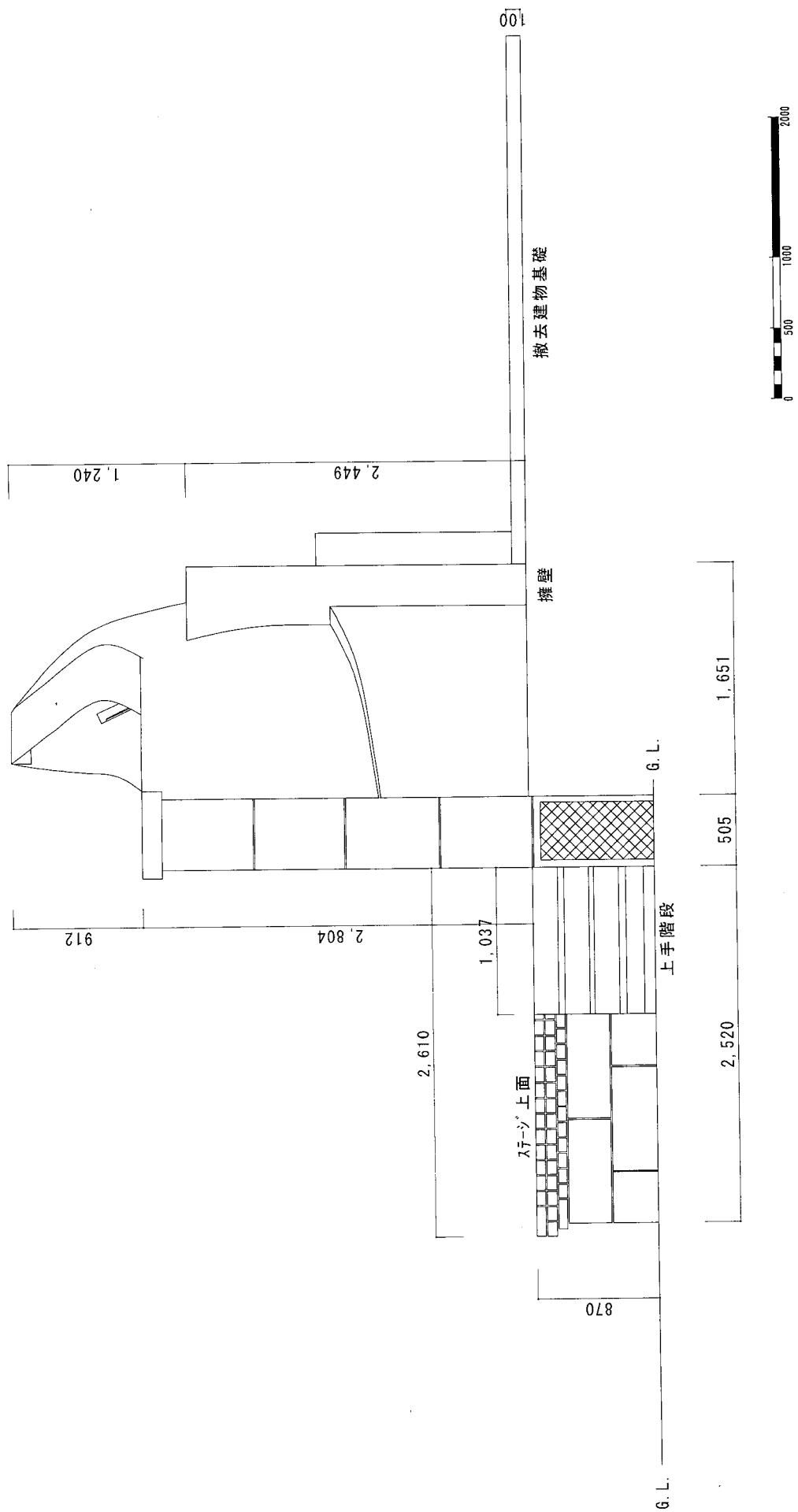
第15図 円形野外講堂正面図

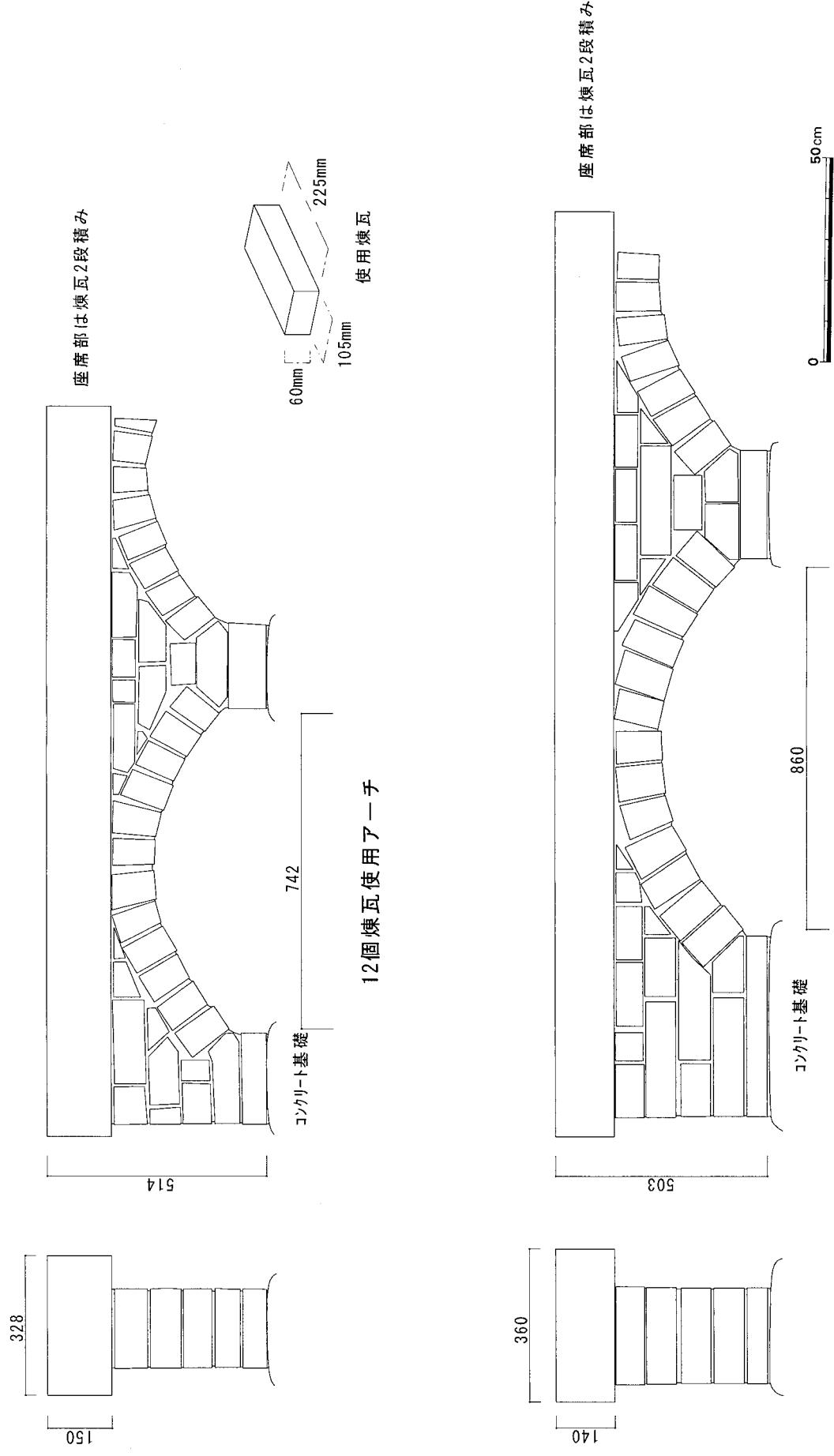


第16図 円形野外講堂背面図



第17図 円形野外講堂側面図





13個焼瓦使用アーチ

第18図 円形野外講堂座席詳細図

目地などに使用されているコンクリートにもいえる。尚、ステージ前縁で使用されている煉瓦は12個のアーチと同様である。

## 第6節 考察

ステージと客席の配置は古代ギリシャやローマの劇場と同様である。なだらかな傾斜をもつ地形を利用しつつ周囲に壁などを設けていないことから大変に開放的である。このことは閉鎖的な古代ローマの劇場よりも古代ギリシャの劇場を思わせる空間構成である。また全体の構成はステージ上の中心点から同心円状に客席を配置しあつ左右対称である構成はまとまりを感じさせる。

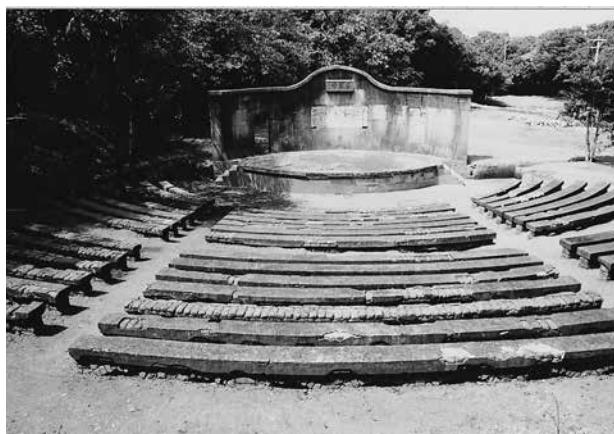
ステージのプロスケニオンに立体的な曲面を用い、かつ観客席の脚部にアーチを用いるなど曲線を中心に構成される形態は特異である。特にプロスケニオンの曲面は音響効果を考慮した設計がなされたことに注目すべきである。

座席脚部にはアーチを連続させたデザインが用いられている。このアーチは12個あるいは13個の部材で構成される二種類存在する。その内偶数個の部材で構成されるものは構造体としてではなくデザインに重きを置いていることも重要である。

全体的に非常にまとまりのある設計がなされているが一方では雨水の処理に設備的な欠点も存在する。

## 第7節 まとめ

このような野外講堂は久留米市には勿論のこと他の地方にも類例が見当たらない。また前章までに述べたようにアーチを基本コンセプトにしたデザインは造形的に優れておりかつ珍しい。さらに全体的な保存状況が良好であることから今後、何らかの修復を施し将来に向けて保存していくことが望ましいと思われる。陸軍関係の遺産は他にも残されているが軍事施設以外の例として近代化遺産としての価値があると思われる。最後に今後の利用についてであるが一般に建築物は利用せずに放置すると痛みが出安いと言われている。このことは当野外講堂が煉瓦造の構築物とはいえ他の建築物と同様であろう。この種の施設は利用してはじめてその価値が生かされると思われる。今後は野外施設であるため開催の季節を考慮した何らかの催物で利用することが望ましい。



第19図 円形野外講堂全景（東から）



第20図 円形野外講堂ステージ（南東から）



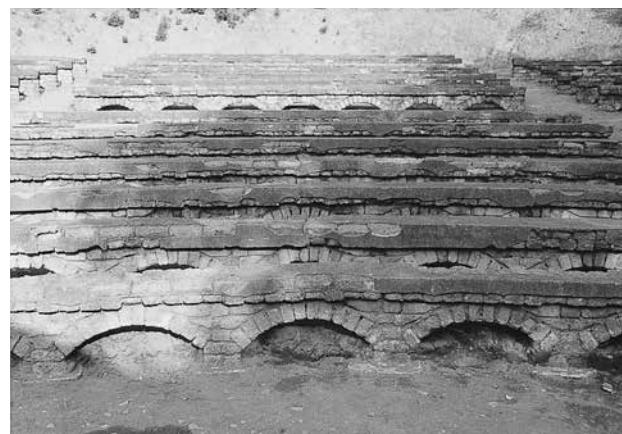
第21図 円形野外講堂座席（北西から）



第22図 円形野外講堂座席（北から）



第23図 円形野外講堂座席（南から）



第24図 円形野外講堂座席（西から）



第25図 ステージ背後の壁面（西から）



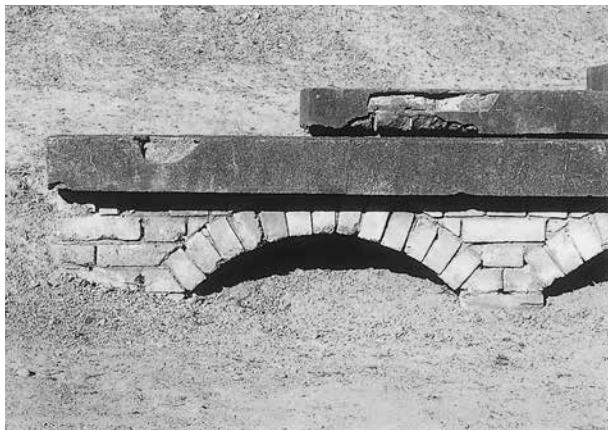
第26図 ステージ背後の楽屋基礎（西から）



第27図 ステージ北側階段（東から）



第28図 石製肩額



第29図 座席アーチ部分（13個）



第30図 座席アーチ部分（12個）

## 付論 久留米陸軍墓地について

### 第1節 久留米陸軍墓地建設奉賛会

久留米陸軍墓地の建設を行ったのは「久留米陸軍墓地建設奉賛会」である。この奉賛会の設置時期・経緯などについて不明な点が多い。昭和14年2月頃、準備団体が立ち上げられたらしく、第1回の陸軍墓地建設奉賛会発起人会は同年5月10日に開催され、15年1月17日に第3回、17年2月26日に第5回の総会が開催されていることが分っている。(以下、断らない限り記述の根拠は「福岡日日新聞」による)

奉賛会の構成は発起人として久留米在住の志岐豊中将を中心となっているが、第3回の陸軍墓地建設奉賛会発起人会には次の人々が参加している。

会長志岐豊中将、理事長田中少将

行政 石橋徳次郎久留米市長、柴田佐賀県町村長会長 添田福岡県町村長会長

宇藤大分県町村長会長 各市長代理、町村長50余名

来賓 長瀬師団長 池之上少将 山本參謀長 永野中佐 各部隊長など

その他の記事から理事、評議員などの役員名も見えるが、具体的な構成は不明である。そのほかに陸軍墓地の建設に貢献したものとして在郷軍人会久留米市連合分会長であった高柳常一中佐(大正12年退役)、畠瀬安太郎中尉、中山岩吉工兵大尉などの名がしられる。

行政として福岡・佐賀・大分県町村長会長が参加しているのは大正15年5月以降に久留米連隊区司令部の所管範囲が従来の筑後一市六郡及び佐賀県三養基郡・神埼二郡に加え、新たに佐賀県佐賀市、小城、東・西松浦の一市三郡及び大分県日田郡を管轄していたからである(久留米市誌)。

第1回の総会での決定は陸軍墓地建設奉賛会は事業費25万円を寄付に仰ぎ、建設のための労力は各方面からの勤労奉仕を期待するものであった。久留米市の負担金は16,413円であったが(続久留米市誌)、この例からすれば事業費の一部は福岡・佐賀・大分の各市町村に割り当てられて集められたと推測される。14年9月には山門軍の町村長会長から7千円の墓地建設基金が奉賛会に寄託されているのはその事を補強している。陸軍墓地建設が連隊区司令部の管轄する広域の行政を巻き込んだ運動であったといえよう。

会長である志岐中将は久留米軍友会会長であり、十八師団が前面にたつことを避けつつ、総会はいずれも偕行社で行われており、偕行社そのものが陸軍将校の共済団体であることから軍の深い関与が明らかである。表向きは地元の運動として在郷軍人会・行政が動き、背後から陸軍が影響力を持つものがこの奉賛会の基本構造であったと考えられる。

来賓として久留米師団の軍人の参加はこのことを示すものであろう。昭和15年4月には下河辺連隊区司令官などの斡旋で商工省からセメント約6千俵の特別手配を受けているのは、そのことを示すものであろう。

### 第2節 建設期間について

当初、奉賛会の予定では昭和15年7月7日の事変記念日(日中戦争の開始となる蘆溝橋事件)に盛大に落成式を行う予定であったが、昭和15年4月段階で計画されていた靈柩式墓碑5基の建設が忠靈塔建設との関係で設計変更がせまられた関係で、同年10月頃に落成式を上げることになっている。

しかし、忠靈塔の設計と資材の確保などで手間取り、15年9月段階では来春16年4月・5月に完成をみるとされているが、17年2月26日の第5回発起人総会で、ようやくこの年の4月中旬に竣工式及び慰靈祭典を行うこと

なっており、当初の計画からすれば1年9ヶ月近い遅れがあったことになる。

この建設期間の長期の延長は15年4月の陸軍からの忠靈塔建設の命令による設計変更もあるが、戦争の激化による物資の不足、労働力の不足などが工期の延長の原因と考えられる。その原因の詳細な理解は今後の課題としなければならない。

### 第3節 勤労奉仕の動員について

**14年の動員** 陸軍墓地の地鎮祭は昭和14年7月22日に行われ、具体的な建設工事は7月29日から開始されている。最初に工事を担ったのは管内の中学生徒等である。勤労奉仕として行われ、7月29日三池農業150・浮羽中学70、30日三井農業100・三池農業150、31日三井農業100・三池農業150・浮羽中学90、8月1日南筑中学350・三井農業100、2日南筑中学350・三井農業100、3日南筑中学350・三井農業100、4日三養基中学200、5日三養基中学200、6日久留米商業500・久留米夜間中学100、7日久留米商業500、8日から11日久留米商業200、12日から13日八女中学400、14日八女中学400・伝習館130、16日伝習館130、23日から25日明善中学、27日から29日南筑中学270、9月4日から8日九州医専700など夏休み中の学生が動員されている。近隣の学校の男子生徒全員が根こそぎ動員されたといえる。

この夏休み中の学生生徒の奉仕など延べ人数は1万1千人とされており、学生が動員できない9月中旬からは一般からの動員が目指されている。

9月13日に久留米市警防団第五分団120名が陸軍墓地の整地作業に奉仕、この際には国分町の国防婦人会分会役員が氷水の接待を行う。同じ日、町部からのトップとして久留米市新町三丁目からの町内総動員での奉仕の申し込み、17日には井上助役を始めとする久留米市吏員189名、9月23日から26日までの4日間に久留米市農会で千名を越える勤労奉仕がなされるなど、町内会、各種団体など動員がなされていることがしられる。奉賛会の事務局には奉仕作業の申し出が殺到し、作業日程の編成に忙しいと9月14日の新聞は報じている。

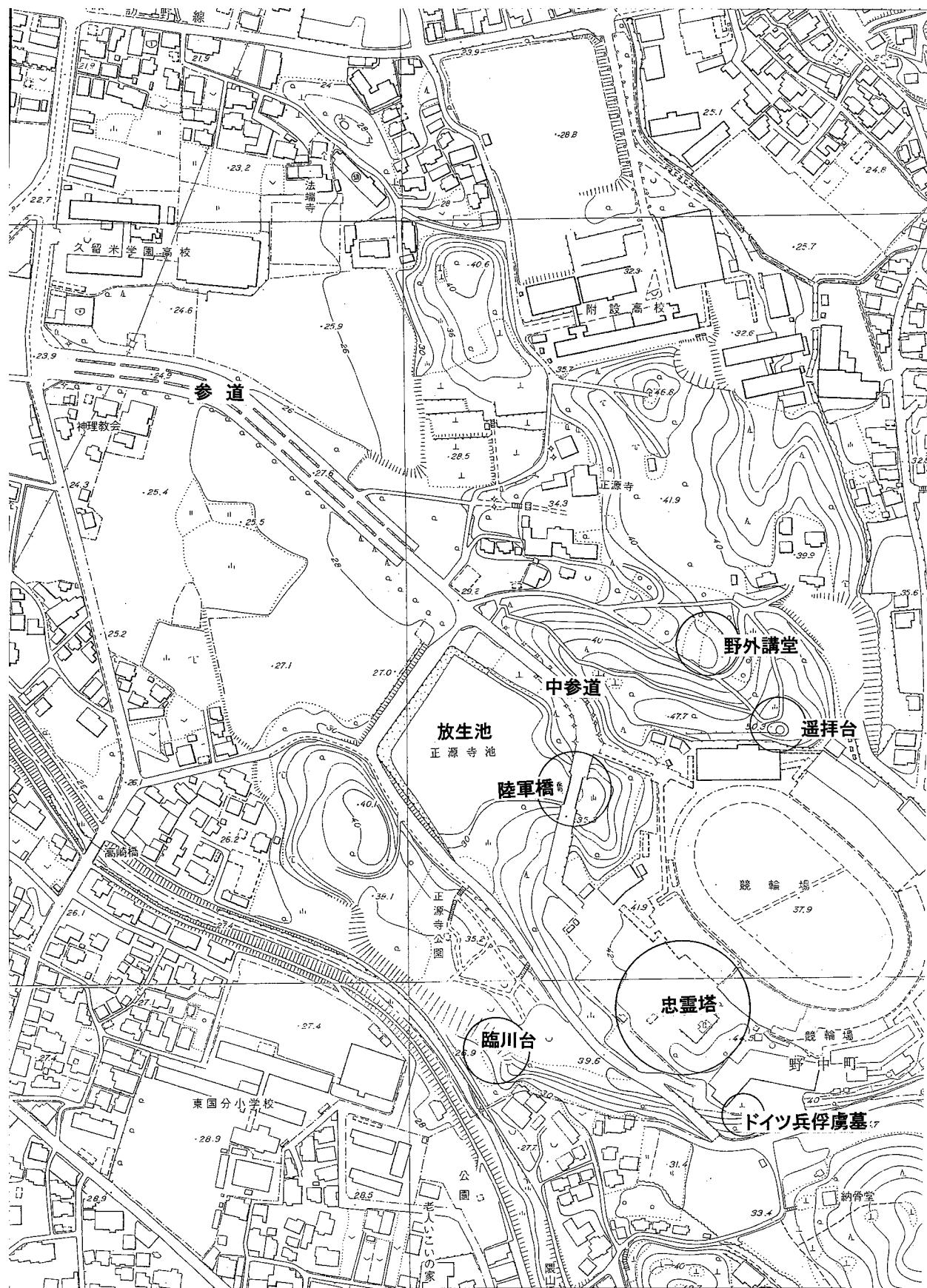
14年11月段階では連隊区管轄下各市町村の各種団体の奉仕で6、7割の整地が完成し、農繁期のため農村の奉仕団が減る中で、11月に入り15日までに市部の奉仕申し込みが多く、久留米市で51団体、大牟田市24団体、合計75団体、延べ人数1万5千人を超える状態と報じている。この時期まではまだ動員も順調である。

**15年の動員** 15年1月になると「繰出せ奉仕部隊」と7月までの完成には少なくとも4万人以上の奉仕団が必要とされており、手始めに久留米市内の325の町常会に呼びかけ、毎日100名以上に出動が要請されている。3月10日久留米師団司令部員が、5月3日には帰還した高橋部隊、5月23日には久留米市議会員ならびに商工会議所議員80名、6月21日に久留米陸軍病院の白衣勇士・看護婦・看護兵270名などの動員があるが、7月の農繁期に入り奉仕人員が減り足踏み状態となっている。

そのため再度、高専・中学生徒の延べ一人動員を夏休み中にを行いその窮状を解決している。今回の動員は男子校である南筑中学・久留米商業・中学明善・九州医専などとともに、初めて久留米高等女学校生徒が動員されたのが注目される。

この頃には軍の動きが活発になり9月21日には渡辺師団長以下が、10月には久留米憲兵隊及び憲兵分隊、29日には戦没者遺族が奉仕をおこない、この時には志岐中将、市長代理諸富収入役の挨拶があり國友社会課長、銃後奉公会書記2名などの指導で軍事援護相談員、婦人相談員、各宗報国会の僧侶なども協力して行われている。社会のあらゆる分野の人々まで動員がなされているという印象がある。

11月には旭屋店員が献木植え込みの奉仕を行っている。21日には商工青年連盟40人、24日には明治通り三



三四丁目常会、28日市他三井・三瀬・浮羽・八女・山門の一市五郡の神道各派連合会130余名が奉仕を行っている。

この頃から市内の国防婦人会は陸軍墓地労力奉仕者への湯茶接待奉仕を行っており、各分会から5名づつ奉仕するようになっている。分会としては南薰、長門石、節原、日吉、鳥飼、莊島、篠山などの地域分会とともに鐘紡・日華護謨・日本ゴムなどの企業の国防婦人会分会も動員されている。このような国防婦人会の動員は16年7月ころまでの新聞記事に日割りが発表されており継続したものであった。

**16年の動員** 国防婦人会の陸軍墓地奉仕団体への湯茶接待は続いている、各種団体の奉仕は継続していたと思われるが、実態が不明な点がおおい。5月に渡辺師団長始め司令部員、久留米青年經濟連盟の70名が、大牟田市第四国民学校区女子青年団100余人、7月には久留米郵便局長以下全局員によって献木植栽が行われている。この月には山川陸軍墓地の墓碑の移転が決定されており、この移転がこの年の作業のひとつである。11月には久留米市明治三丁目・四丁目隣組が奉仕活動をおこなったが、この時の作業は墓石の運搬と園内の垣築きであった。12月には久留米市観光協会が四か所に忠靈塔案内の道標を建設することを決定している。このような状況から陸軍墓地の建設は大方終了したのがこの時期と推測される。

#### 第4節 施設の概要

**参道** 十三部から国分方面に南に延びてきた道路につながる参道である。参道は表参道と中参道からなる。表参道入り口に靖国神社の大燈籠を模した御影石製の灯籠が入り口両側に置かれている（第32図）。

参道は中央の車道と両側に歩道が設置され、幅28mとされる。中央の車道は幅7m、歩道は幅4mである。歩道と自動車道の間には植樹帯があり、幅2.6mある。そこには楠の木が植えられている。歩道の外側にも楠木が植えられた部分があり、その部分を加えると幅28m近い道路幅となる。

この道は約350m続くが、入り口から約275mで歩道帯がなくなり、中央の道のみとなる。それから中参道と呼ばれる参道が幅10mでさらに南に湾曲して忠靈塔前の広場まで約200mのびている。放生池に架けられた陸軍橋もこの参道の一部である。陸軍橋までの参道には花崗岩製の同型の春日灯籠が北側に21基、南側に15基設置されている。燈籠の基礎部はセメントで固められ、この燈籠列にそって丸川石を使った小端立が残っているところがある。この道部分には玉砂利が敷かれていたようである（第33図）。

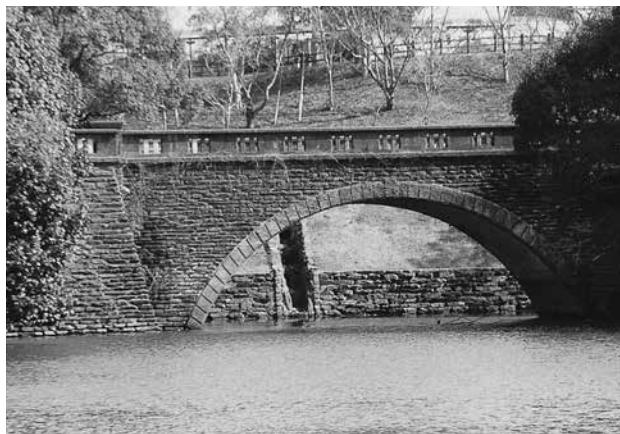
表参道の建設は昭和14年11月15日から着手。参道の両側の楠木は同15年11月に久留米旭屋店員の勤労奉仕で植えられ、同16年7月12日には久留米郵便局全員で購入した栗・銀杏・山桃などを参道の右側に植栽したという。

**陸軍橋** 参道の一部であり、放生池に架けられ、高さ15m、幅8m、長さ21mの橋である。概観は緑泥片岩を積み上げた印象を受けるが、鉄筋が入らないコンクリート造りのアーチ橋である。欄干の親柱には「陸軍橋」「昭和十七年四月竣工」の銘板がある（第34図・第35図）。

**放生池** 築造時期は不明であるが、本来は農業用水として築かれたもので、大正2年の地図には記載されている。面積は3,300坪とあるが、現在は正源寺池と呼ばれ、面積は8,211m<sup>2</sup>とある。陸軍墓地の建設にあたり、靈園に繰り込まれ、「放生池」として新たな性格を与えられたものである（第34図）。



(左) 第32図 参道入口に立つ碑と大灯籠（西から）  
(右) 第33図 中参道の春日灯籠（西から）



第34図 放生池と陸軍橋（西から）

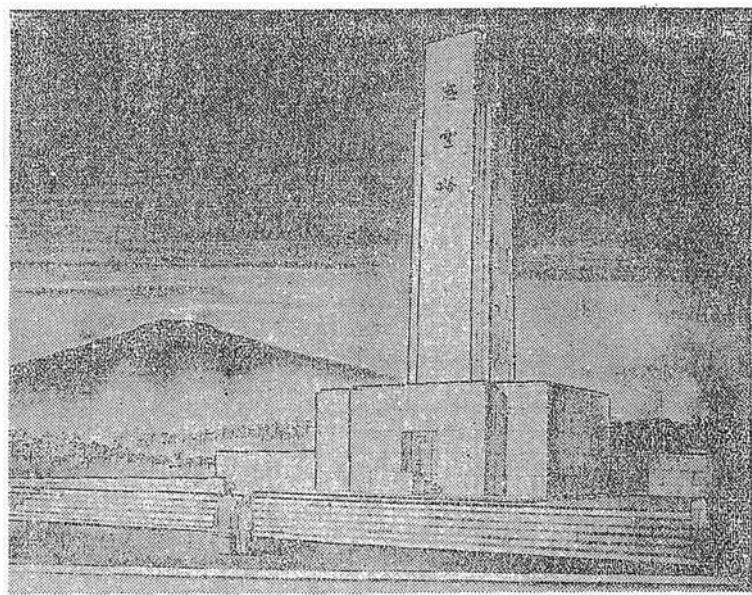
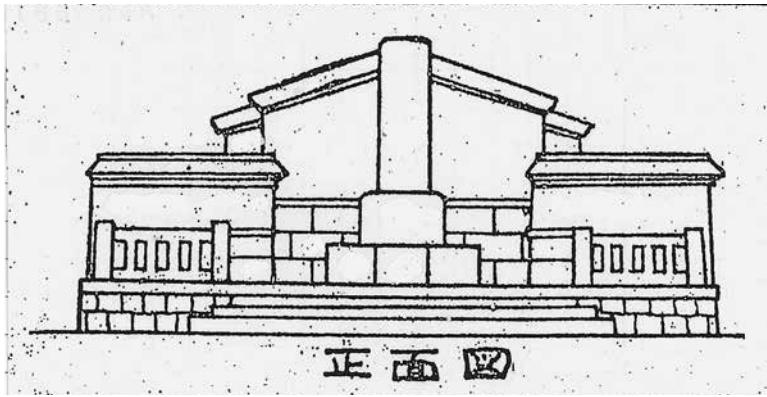


第35図 陸軍橋（北から）



(左)  
第36図 遥拝台全景（西から）

(右)  
第37図 遥拝台上の宮城遥拝塔



—圖計設の塔忠地墓軍陸久留米に來出に事見—

(上) 第38図 霊柩式墓碑 (福岡日日新聞昭和14年7月29日)

(下) 第39図 忠靈塔設計図 (福岡日日新聞昭和15年9月1日)

ことになった。忠靈塔の建設にあたり陸軍省から日本忠靈顕彰会が懸賞募集して採用された設計図が奉賛会に示され、それに基づき、同年9月に設計図が出来上がり、建設されたようである(第39図)。

陸軍省が示した設計よりさらに規模が大きくしたもので、基壇からの塔の高さ17m、幅3m、納骨所の高さは6m、幅8m、台の正面幅23mとし、その外面は御影石で張り詰めるものである。遺骨は納骨所正面から入り、数室に分けられた台の内部に安置されることになっている。塔正面には徳島産の花崗岩に渡辺正夫中将揮毫の「忠靈塔」が彫られている。忠靈塔前の広場は玉砂利がしかれていたというが、現在は芝生が張られ、公園となっている。入り口左手にある手洗石は浮羽郡水縄村(現浮羽郡田主丸町)から戦車で引かれてきた物という(第41図)。また、山川陸軍墓地にあった墓石は塔の背面に埋められている。

**ドイツ兵俘虜墓** 青島を舞台とする日独戦争で俘虜となつたドイツ兵の一部は久留米俘虜収容所に5年3ヶ月の間収容され、その間に11名が死亡している。その俘虜の墓は山川陸軍墓地にあったが、墓地の移転とともに陸軍墓地の一角に移された。場所は忠靈塔の裏山の松林であった。戦後は久留米競輪場選手宿舎敷地内にあったが、平成9年4月に正源寺池のほとりに移されている(第42図)。

**野外講堂** 規模などの詳細はすでにふれており、概要だけに絞る。新聞報道では直径22mの円形、500人を

**遥拝台** 円形野外講堂から東に参道を登ると遥拝台に行き当たる。現状では標高50.3mの地点にあり、建設当初でも最高所ではなかつたかと推測される。外見は裾広がりの円柱状をなし高さ4.8m、底部径6.0m、屋上径5.3mある。野外講堂と違い赤レンガを積み上げ、内部には螺旋階段があり、登りきると屋上に遥拝塔が設置されている。

屋上には円形の手すりが廻り、中央にある塔には花崗岩製の方形の標柱が西面して「宮城遥拝」と刻まれており、東方に向かって参拝するということになる。標柱の背後には国旗掲揚の木柱が設置されていた痕跡がみられる。

戦後の昭和23年に久留米陸軍墓地奉賛会から久留米市が寄付を受けた際に、「煉瓦造円錐形展望台 八坪」とされている建造物である(第36・37図)。

**忠靈塔** 陸軍墓地奉賛会は当初、靈柩式墓碑五棟(第38図)を計画していたが、建築資材の関係と忠靈顕彰会の忠靈塔建設の関係から、昭和15年4月陸軍省からの変更指令があり、忠靈塔の建設を行う



第40図 忠靈塔全景（西から）



第41図 忠靈塔前の広場におかれた手洗鉢



第42図 ドイツ兵俘虜墓（北から）



第43図 臨川台（北西から）

収容するもので、昭和17年4月10日の忠靈塔竣工式と鎮靈祭では、地元女子青年団による奉納舞踊などが行われている事がしられるが、利用の様子は明らかではない。ステージ背後には黒板などが壁にはめ込まれており、講演などを行うことは可能である。

**裏参道** 忠靈塔に向かう参道とともに、野外講堂・遥拝台をめぐる参道が作られているが、この道は裏参道とよばれている。正源寺池北手で表参道から分かれた道は野外講堂、遥拝台と経由して忠靈塔の背後をめぐり、南の丘陵に高良川を望む臨川台につながっていたようである。この部分は競輪場が作られ、旧状を大きく壊しているため詳細は不明である。なお、道幅は5mあるというが、現状ではこの幅はない。

**臨川台** 現在は市が整備した正源氏公園内となっている。現状はまわりに樹木が育っているため展望が悪いが、建造当初は高良川を眼下に望みながら国分町方面まで眺望できる地点であったことが推測される。高良川が侵食した丘陵端斜面に石垣を築きあげて長方形の突出部をつくりだし展望台としている。南北方向15.8m、東西7.4mの規模である。転落などを防ぐためにコの字形にセメント製の手すりと、それに沿うような形で花崗岩を使ったベンチが東辺4基、西辺4基、南辺2基、計10基が置かれている。手すりの形態は陸軍橋の欄干や遥拝塔の手すりとよく似た印象がある（第43図）。

展望台から高良川沿いへ降りる階段が設けられており、下るとそこには小公園がある。いずれも現代的な改裝があり、本来あった公園か疑問もあるが、公園敷地と高良川との境には「陸軍」の境界標が2本残っていることなどから、この部分も展望台と一体のものと判断している。

## 第5節 建設後の陸軍墓地

昭和17年4月10日に陸軍墓地忠靈塔竣工式と鎮靈式が行われている。同年5月8日には従来牟田山練兵場で行われていた久留米招魂祭は陸軍墓地忠靈塔前で行われるようになった。18年の8月22日には戦死者供養の盆踊り大会が忠靈塔前で開催されている。19年4月には千本杉・十三部から正源寺山の陸軍墓地参道に通じる道路の拡張に着手するなどの動きがある。

戦後は昭和23年に久留米競輪場の建設のため、奉賛会の土地と国有地の払い下げ問題が起き、23年5月28日付けで久留米陸軍墓地奉賛会会长志岐豊代理、理事長高柳常一名で土地4筆（三町7反4畝余）と建物杉皮葺木造平屋建一棟（16坪、コンクリート造野外講演場（16坪、煉瓦造円錐形展望台（8坪）を久留米市に寄付している（『久留米市史』第11集資料編現代）。木造建物が現存しないが、野外講演場が野外講堂、展望台が遥拝塔のことである。参道は久留米市道となり、市の管理となっている。現在は大半の土地が久留米市所有であり、管理は競輪事業課が行っている。また、忠靈塔は市の保健福祉部保護課で管理している。

## 第6節 今後の課題

陸軍墓地の建設過程は未だおぼろげであるが、解明の端緒についたという段階である。忠靈塔の建設についてはいくらか建設の過程がわかるが、その他の施設である陸軍橋、遥拝塔、野外講堂などについては具体的な資料が確認出来ず、建設時期などの解明は今後の課題となる。

また、陸軍墓地全体の建設構想、具体的には墓地公園ともいえる参道、忠靈塔と遥拝塔、円形野外講堂を組あわせた施設が何を表現しているのか明らかにするのも課題である。さらに、円形野外講堂、遥拝塔、陸軍橋には必ずアーチ、円を基本とする設計が行われているが、基本構想から実施までおこなったこの組織・集団の解明も課題となる。この集団は陸軍内部の経理部・工兵隊等にいたと想像されるが、アーチを基本とする優れた設計を行い、現在でも評価される建造物を残した人々の存在は注意される。

戦争の時代の遺跡は現在失われつつある。戦争を経験した人々も少数派となりつつあるなかで、60年、70年前の戦争の時代の遺産を歴史の記録として残していく作業は急がなければならないのであろう。

## 円形野外講堂

久留米市文化財調査報告書 第202集

2004年3月31日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

印刷 (株) エヌティパック